

# Fate/ANOTHER FAIRY

ユーリ・クラウディア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

姫ギルとモーさん出したいがために作った駄作設定、パワーバランス度返しです。

他の作品をメインに書いているんで完全不定期、息抜きに時々書く感じです。

警告は保険、多分若干のそういう要素を使う、過激な事はしません。  
この作品とは別にメインで執筆してる作品が有るのでこいつはかなりの不定期になると思われ

そんな、いい加減な作品が嫌いな貴方はG o t o b o c k !!

# 目次

物語は突然に	1
祝就職・ギルド入団	5
討伐依頼は基本割のいい仕事	9
親子の問題	13
宝具は料理	17
ゴーイングマイウェイ	21
Sランククエスト	27
帰ってからのごたごた	33

物語は突然に

「なんじゃ…」

士郎は木々の生い茂る森の中でそう呟いた。

事の発端は凜のおつちよこちよいだ、魔法の実験中に事故って気づいたらこの状況…

まあ、魔法に失敗して此処に来たんだ。多分異世界とか平行世界とかそう言う奴だろう。

「取り敢えず俺の体に異常が無いか確認するか…、トレース・オン同調・開始」

魔力回路 27本 超活性化 強度上昇

身体年齢 18歳

身体 両手の甲に魔術刻印発見

身体能力 異常なし

ヴァリア遙か遠き理想郷ロンドン 正常に可動

固有結界 正常

魔力量 200倍に増加

「…なんじゃ」

まず、魔力回路、活性化って何さ？強度上昇はまあ分かるけど

次に身体年齢18歳って…身長とか筋肉とか変わらないのに若返っている…、本来今年で23歳のはずだ

身体に魔術刻印ってどゆこと？ナニコレ怖い

身体能力はまあ体格が全く変わってないし当然と言えば当然か。

遙か遠き理想郷と固有結界は何の問題も無しと…

そして、一番の問題…、と言うより珍事、魔力量200倍って何さ

!?

しかもなんかこの辺凄く魔力が濃いんだけど…

「取り敢えずこの魔術刻印について調べるか…」

そう言つて刻印に触れる士郎、すると刻印が光り消える。

その代わりに手紙と何か良く分からない金属の破片が二つ…

「なにこれ…」

士郎は手紙を拾い中身を読む

『士郎よ、お前封印指定になつた見たいだから異世界に行つてこいや、なに心配なんて無い、そこは封印指定何て無いし、法則の違う真の意味での異世界だ、魔術も魔法として公になっている。文字は昔教えてやった奴にそののが混じつてるから安心しろ。この手紙と一緒に持たせた金属片は選別だ、聖遺物だからサーヴァントでも召喚しな、陣は二種類手紙に同封した二回分の魔力も宝石に込めてその手紙に同封されている。困つたらマカロフつて爺さんを訪ねな、飲み仲間だ、俺の正体は知らんけどな。それじゃあ二度目の人生だと思つて謳歌しな。』

p. s 嬢ちゃん達はこの事知らないから死に物狂いでお前の処に行こうと思うが多分たどり着けないわ。

b y ゼル

レッチ』

「…」

静寂が世界を支配する。

「ふ…、ふざけんなあぁー！！！！！！」

まだ見ぬ異世界に、士郎の叫びが響き渡つて行つた

\*\*\*\*\*

今回の件がハツチャケジジイのせいだと発覚して暫く、落ち着いた  
士郎はサーヴァントを召喚する事にした訳だが。

「お前が、俺（我）のマスターか？」

「あ…、ああ。」

召喚された二人の言葉使いからまたアクの強いのを召喚したみた  
いだ。

「俺は衛宮士郎よろしくな」

「サーヴァント、クラスセイバーだ、真名はモードレッドだ」

「サーヴァント、クラスアーチャーだ、真名はギルガメッシュだ」

「…」

士郎は絶句した。

モードレッドが女なのはアルトリアが女だったからわかるが…

ギルガメッシュがなぜ女なのだ？

「あ…アーチャー、聞いてもいいか？」

「なんだ？」

「俺、前にギルガメッシュに会った事があるんだが、その時のギルガ  
メッシュは男だったんだけど…、アーチャーはどう見ても女だよな  
…」

「ほおう、我に在った事があるか…、しかし我は正真正銘生まれも育ち  
も女、恐らく性転換の薬でも使っていたのだろう。アレは人格にも作  
用するからな。」

「そ…そうなのか？」

実はアーチャーの聖遺物はゼルレツチが平行世界で偶然見つけた  
物なのだが、それを知らない二人は全く違う答えを導き出す。

「そんな事よりマスター、此処は何処だ？」

モードレッドが聞いてくる

「ああ、それなんだがな…」

\*\*\*\*\*

説明する事30分

「そいつはまた面白そうだな」

「ふむ、ではマスターよ、貴様に真名で呼ぶことを許可しよう。完全な異世界なら問題あるまい。」

「おっ、いいねえ、俺の事も真名でいいぜ。クラス名で呼ばれるのは落ち着かないからな！」

「分かった、俺の事も士郎って呼んでくれ、マスターなんて呼ばれてたら、目立ってしょうがない。」

こうして、お互いを名前を呼ぶようになった三人

「それで、これからの事なんだけど…、取り敢えず人里を探すで良いかな？」

「まあ、それが妥当だわな。」

「フツ、私の宝具を使えば人里を探すなど造作もない。」

「それなら頼めるか？」

「任せろ」

こうして、異世界に送られた士郎の物語が始まったのだった。

## 祝就職・ギルド入団

あれから歩く事3時間と少し

シロウ達はとある街に着いた。

「えーと、ま、ぐ…のりあ…、マグノリア、って街みたいだ。」

「ま、取り敢えず街を歩いて情報収集だな」

「ふむ、そこそこの街のようだな。」

そう言つて三人は街に入つて行つた。

道を歩きながら周囲の人間の会話を拾い情報を集めていく

何やらこの世界にはギルドなる組織がそれぞれ何でも屋のような事をしているようだ。

この街にあるギルドは世界屈指の有名ギルドらしい。

「てつとこか、そこに行けば何かあんじやね?」

「そうだな、そこでマカロフって人の事聞きや何とかなるかもな」

「まずは、そいつらを服従させるのも一興だな」

「頼むからやめてくれ…」

こうして、ギルドに行くとした三人

道に迷う事一時間ようやくギルドに着いた。

そして、ギルドに足を踏み入れると

何かが飛んできた

モードレッドがそれを蹴り飛ばしてそれは壁にめり込む

「…」

「あー、なんか飛んできたから咄嗟にやっちゃまった、わるい」

ギルドメンバーの視線が集まる

そして、蹴り飛ばされた奴が復活する

「誰だ?お前ら?」

「この辺じや見ない顔だが…」

「ああ、人を探していてな、世界屈指のギルドがこの街に有るってさっ



き聞いてな、知ってる人が居ないかと尋ねた次第だ。」

「へー、なんて人だ？」

「確か、マカロフって名前の爺さんらしいけど…」

「へ…？マスターのじっちゃんか？」

「ん？知っているのか？」

早速当たりを引いたようだ

「知ってるも無いにもそれはこのギルドのマスターだぜ？」

近くに居た半裸の男が言う。

「へー、それは良かった、悪いんだが今面会できるだろうか？」

「ちよつと待ってね〜」

そう言っつて銀髪の女性が奥に入って行った

「なあ！お前ら強いのか!？」

先程蹴り飛ばされた桜色の髪の男が訪ねて来る。

「まあ、俺は少なくとも弱くは無いな、強いかと言われると微妙な所だ。後ろの二人は間違いなく強いな」

あの戦争からかなり成長したが未だにギルガメッシュを除く全てのサーヴァントに勝てる気がしない、ギルガメッシュも慢心していない状態なら瞬殺される自身がある。

士郎はこの様に評価しているが、現在サーヴァントの器に押し込められて居ない英霊エミヤの一步手前くらいの武力を誇り、世界との契約をしていない事を加味すると、滅茶苦茶強い。そして、今回の魔術回路の活性と強度上昇、魔力量の上昇を入れると、総合的には既にエミヤに並んでいる。あと数年もすればエミヤを圧倒できるようになるだろう。それはつまり現在士郎は後ろの英霊達と互角に勝負できる事を意味する。最早激つよである。

「なあ、ちよつと勝負しないか!」

そんな事を言い出す少年

「勝負って言っただってな〜」

困り果てる士郎、しかし

「面白そうじゃん、いいぜ俺が相手になってやるよ」

モードレッドが受けて立った。

「おい！モードレッド！」

「良いじゃないか、硬いこと言うなって。」

そう言つて無手で構えるモードレッド

「ハア…、ほどほどにしるよ…。」

呆れながら言う土郎。

「これは良い余興だ、つくづく粘れよ。少年」

ギルガメツシユもなんか乗り気だ…

そして少年が突つ込んで来た

「火竜の鉄拳!!」

「うお…！なんだそりゃ手から炎が出てんぞ!？」

そう言つて余裕で回避するモードレッド

「へー、アレがこっちの魔術かあー」

土郎はこれ幸いと分析していく

「炎には驚いたが、本人はまだまだだなあ」

そう言つてモードレッドが少年の胴に一撃入れる

吹き飛ぶ少年、吹き飛んだ先に先程一撃を入れたばかりのモード

レッドの姿が在った

そして吹き飛んで来た少年を床に叩きつける。

「こんなもんか、精進しろよ…少年。」

ギルド内が静まり返る。

「おい、やり過ぎだ…。」

「悪い悪い、ついね」

土郎はモードレッドに呆れる

「まあ、でも流石だな、見事な体裁きだよ」

「…。」

鉄砲を喰らった鳩のような顔をするモードレッド

「これはどういう状況じゃ?。」

そこに小人もかくやと言う低身の老人がやって来た。

「まあ良い、それで君達がワシに会いたいと言っている者達で間違いないな。」

「はい、貴方がマカロフさんですか、俺は衛宮士郎、ゼルレッチの紹介で来ました。」

「ほう!?ゼルレッチとな!奴は元気か?」

「はい、それはもうハツチャケてます。」

「そうかそうか、それで今回はどんな案件で来たのじゃ?」

「はい、その俺がちよつと厄介な事に巻き込まれて…、それで、それを見たあの爺さんが何を思ったのか、気まぐれに無理矢理有無を言わず此方に放り出しやがりました。この辺の地理も常識も疎いので、困ったら貴方を頼るようにと言っていたので訪ねて来たのです。後ろの二人は巻き添えを喰らった感じですよ。」

「ふむ、そうか…、」

何やら考えているマカロフ

「提案なのじゃがうちのギルドに入らんかの?」

「ギルドに…:ですか?」

「うむ、そこに転がっとなるナツを見るにこいつが勝負を吹っかけて返り討ちに在ったのだろう?腕つぶしの強い奴は大歓迎じゃ。それに常識は兎も角マナーは分かっとなるみたいだしの」

「どうする?」

士郎は二人に意見を求める

「いんじゃないか?仕事もないし、身元不明の俺ら雇ってくれるんだら」

以外にもモードレッドがまともな意見を提示して来た。

「我も構わん、面白そうだ。」

ギルガメッシュはいつも通りのようだ。

「それでは、お言葉に甘えさせていただきます。」

こうして、三人はギルド フェアリーテイルに入ったのであった。

## 討伐依頼は基本割のいい仕事

「それじゃあ入団の手続きも終わったし早速クエストに行くか。」

入団手続きと言ってもマスターに許可貰ってギルドマークを体の何処かにつけるだけ。

因みに士郎とモードレッドはともに背中の肩付近に、ギルガメツシユは腹部のヘソの右側につけていた。

ギルガメツシユは最初は紋章をつけるのに難色を示したが後でいつでも消せる魔法スタンプである事を説明されて渋渋了承していた

「俺達の戦力なら討伐で良いんじゃないかね?」

「そうだな、基本過剰戦力だしな。」

「我らに勝てる者がどれ程居るか、いや、まだ見ぬ世界に心躍る。」

そんな会話をしながらボードの討伐依頼を金額が多い順に五つほど引き?がす。

三人は初クエストにAランククエストを複数抱えて出て行った。

「おい、あの新入り達Aランクのやつを複数持ってきたぞ…」

「ナツ瞬殺するような奴らだ何とかなるだろ」

「そう言えばそのナツは?」

「ああ、さつきサラマンダーが何とかって言ってクエストに出かけたぞ」

こうして三人は常識をブレイクを地で行くのであった。

\*\*\*\*\*

三日後

三人はクエストを終えてギルドに戻って来た。

「は?まだ三日だぞ!?アイツ等どうやったら三日でAランククエスト五つも消化できるんだよ!」

尋常ではないスピードに騒然とするギルド

士郎達は合法的かつ迅速に金が必要だったので街を出てから魔力強化全開でダツシユしたただけなのだが片や歴史に名を刻む英霊、片やその英霊になれる可能性を秘めた正義の味方、その速度は尋常じゃない。

ギルガメツシユだけは走るのを嫌がり宝具を使って移動していた  
勿論天翔る王の御座なんて目立つものではなく、もつとこじんまりとした宝具だが…。

討伐自体は言わずもがな、こいつ等強すぎて全て瞬殺だった。

士郎の狙撃で急所に一撃

モードレッドの剣で真つ二つ

ギルガメツシユの宝物庫でめつた刺し

とまあこんな感じだ

「これだけあればそこそこの家を買えるんじゃないか？」

「我にふさわしい建物があるのか甚だ疑問ではあるが、この際そこには目を瞑ろう。」

「俺は住めれば問題ない。」

「それじゃあ不動産屋に行くか」

士郎達がギルドを出ようとした時

「ただいまー！」

ナツが帰って来た。

「ん？ナツ、ハッピー、後ろの子は？」

「おう！ルーシイってんだ、うちに入りたいて言うから連れて来た  
！」

「あいー！」

「ヒヤッホー！前回に続き綺麗な娘が入団だー！」

盛り上がりを見せるギルドしかし盛り上がり過ぎて喧嘩が始まる。

「いいね、俺も混ざるかな」

「やめとけて、お前が入ったら一瞬で死屍累々になるわ…」

そして、ナツが此方に吹き飛んで来た。

それを条件反射で叩き落すモードレッド

「なにこれデジャヴ？」

「いい加減鬱陶しいな、黙らせるか…」

ギルガメツシユの発言に士郎が止めようとするが間に合わなかった。

ギルガメツシユの王の財宝ゲートオブバビロンが喧嘩している全員の眼前擦れ擦れに宝具級の剣を射出する。

ギルドは静まり返り全員がぴくりとも動かない。

「五月蠅いぞ、雑種。」

ギルガメツシユの行動に頭を抱える士郎

「やり過ぎだって…」

モードレッドは腹を抱えて大笑いしている。

「何事じゃ…」

そこにマカロフがやって来た。

「あー、すいませんマカロフさん、うちのが喧嘩にうんざりして黙らせたんですが…、やり方が強引で…」

「ふむ、そうか…、そっちは新入りかの？」

「は、はいー」

マカロフは話しながらチラリと見えた突き立つ剣の業物度合と内包された魔力に冷や汗を流しながら話しを進める。

「まあ良い、それよりも先程評議委員会から苦情が来たぞ。これは何じゃ？討伐時の近隣の被害が山のように書いてあるわい…、お前らは何時も何時もワシを過労死させるきか？」

マカロフの言葉に先程とは違う意味で黙りこくる面々

「じゃが、評議委員会なんぞクソくらえじゃ、お前ら、魔導とは己の魂の全てを使う事で前に進むことができる。評議委員会なんぞを気にしていてわ前になど進めんわ！他者の言う事など気にするすな！己の信じた道を行け！それがフェアリーテイルじゃ！」

マカロフの演説で場のテンションは最高潮に達する

「もう理念からして全く違うんだな。」

「こんな、平和な理念で俺は羨ましいよ…」

「我は大して興味の無い話よ」

こうして三人はそそくさと不動産屋に向かったのだった。

因みに買った家は郊外にある曰く着きの豪邸だったがこの三人にそんなオカルトは通用するはずも無くギルガメッシュの宝具で大体何とかなったのは余談だろう。

## 親子の問題

「ふむ、貴様の料理は我が食すに値する物だな」

「そいつは如何も」

「いや、ホントにうめーな！」

朝食をとる三人

勿論作ったのは士郎だ

士郎はアルトリアよろしく英霊だろうと食事をとらせるので、三人は毎日三食食べている、まあ今は士郎の料理が美味すぎてやめられない状態なのだが…。

ギルガメッシュも士郎の料理を認めているようで時折自分で高級素材を調達し士郎にフルコースディナーを作らせている。

士郎の料理はそんじょそこらの高級料理店では太刀打ちできない程のもので、それは一般の食材を使っても同じ事だ。一般食材が高級食材を下剋上するさまは最早呆れて声も出ない。

ギルドに入って数週間、既に稼いだ金で暫くは豪遊できる状態で、三人は思い思いに日々を送っている。

士郎は普段誰も受けたがらない割に合わないクエストをし人助けに徹する。

モードレッドは相変わらず高難度討伐依頼を受けて日々強者との戦いを求めている。

ギルガメッシュは遺跡探査の依頼を片っ端から受け財宝を根こそぎにし、報酬で高級素材を買い士郎に作らせている。

「なあ、モードレッド、今日空いてるか？」

「あ？特に予定はないぞ。」

「ならちよつと修練に付き合ってくれ、最近骨の有る奴とやってないから腕がなまりそうで…」

「いいぞ、何処でやる？」

「ああ、家の敷地でやると庭が荒れそうだからギルドでやろう。あそこにはそんな施設があったと思う」



「わかった、此れ食い終わったら行こう」

「ほおう、士郎の実力はあまり把握していないからな、我也行こう」  
こうして、三人はギルドに向かった。

\*\*\*\*\*

赤原礼装に身を包む士郎と全身甲冑のモードレッドが向かい合っている。

この二人はお互いに修練とは言え侮って良い相手では無い事を理解しているので。装備を実戦用に行っている。

「さて、準備運動も終わったし始めようぜ」

そう言つてモードレッドは自身の剣を召喚する。

「ああ、よろしく頼む」

士郎も両手に干将・莫邪を投影した。

「二人とも換装系の魔法なのか」

ギヤラリーが興味津々で二人の戦力を考察している。

ギヤラリーは今ギルドに居るほぼ全員でナツやルーシイといった面々も居る

そして、二人はその場から消えた。

それと同時に剣が交わる音が聞こえ、火花が散る。

あまりの速度に目で捉え切れているのはミラくらいだろう。

他の面々は残像が見えているのが精々で全く見えていない者もいる。

「ハッ！結構やるじゃねーか！」

「嫌味にしか聞こえないよ！」

モードレッドに干将・莫邪を折られもう一度投影し直す士郎  
「クソ！」

モードレッドの猛攻に行つたん後方に飛び弓で牽制する士郎  
「無駄あ無駄あ！」

しかしお構いなしに矢を叩き落しながら突っ込んで来るモードレッド

そして、モードレッドの剣が士郎の首に掛けられる。

「降参だ、俺の負けだよ」

「俺の勝ちだ」

ギャラリーは哑然としている

想像を遥かに超える戦い、自身が認識し切れない程の戦いがただの修練だった事に驚愕している。

「やつぱり、モードレッドは強いな…」

「まあ正面から戦えば俺は士郎に負けないぜ、…だがな、これが殺し合いだっいたら分からないぜ？奇襲や狙撃にはそっちに分があるんだから。」

「それはそれ、これはこれだよ」

「何だそりゃ」

笑いあう二人、心なしが不機嫌そうなギルガメッシュ。

「それとき、お前の剣に父上の影が見え隠れするんだが何でだ？」

モードレッドが真剣な顔で聞いてくる。

「それは…、それは俺に剣の基礎を教えてくれたのがアルトリア本人だからだよ。」

士郎は一瞬言い淀んだが、意を決して言う。

「そうか…、父上の…」

「ああ、昔聖杯戦争に巻き込まれた時に俺がサーヴァントとして偶然召喚したのがアイツだったんだ。とんでもなく不器用で大喰らいだったよ」

「…」

モードレッドの顔に影が掛かる。

それを見て士郎は言葉を紡いだ。

「確かに、アイツは国を一番に考えていたから、お前に王位を譲らなかったし、そっけない態度をとった。」

「…投影・開始トレース・オン」

士郎はおもむろにとある物を投影した。

それは自身の半身とも言える物、鞘だ。

「アイツは後悔してやり直しを願っていたけど、最後に自身の失敗を受け入れて逝ったよ…、アイツの鞘のオリジナルは今も俺の中にある。殆ど俺と同化して渡せないから投影品だけど、これを…」

そう言つて士郎は鞘を渡した。

それは半身故にほぼ完ペキに再現された物、全ての工程を無視して作り出された。贋作だった。

「アイツはそれでもお前を愛していたよ。ただ言葉が足りずに行き違いになっていただけで、本当に君を愛していた。」

その言葉にモードレッドは涙を流す。

すかさずヘルムを被り誤魔化したので士郎以外はこの事に気づかなかつた。

「さあ、今日は帰ろう」

そう言つてその場を後にした士郎、それに少し遅れてモードレッドも去って行った

こうして、時と世界を越えて親子のわだかまりに終止符が打たれたのだつた。

## 宝具は料理

「エルザが帰って来たぞー!」

その言葉にギルド内が騒然とする。

「エルザ?」

「この荒くれどもが慌てるって事は、結構上位のポジションに居る奴だな。」

「それよりも、士郎よ早く料理を作れ」

「あははは…」

三人はクエストが終わった時にたまたま遭遇したのでギルドの厨房を借りて昼食を取ろうとしていた所だった。ついでに先程まで起きていた喧嘩から逃げて来たルーシィーも一緒だ。

「彼女がエルザか…」

士郎は料理を作りながら様子を伺う

エルザはギルドの面々に注意をしている。

あのナツとグレイが肩を組んで仲良しごっこをしている…ぶっちゃけあれはシニールだ。

するとエルザは此方に気づき近づいてくる。

「見ない顔だな、新入りか?」

「ああ、こんな格好で失礼するよ。俺は衛宮士郎」

丁度料理が出来上がりモードレッドとギルガメツシュ、ついでにルーシィに配膳しながら名乗る

「モードレッドだ」

食べながら名乗るモードレッド

「ギルガメツシュだ」

優雅に質素に名乗ったギルガメツシュ

「えっと、ルーシィって言います。よろしくを願います!」

緊張しながら名乗るルーシィ

「おい、モード…お前口に物が入ってるときに喋るなよ、飲み込んでからにしろ。」

「はいはい」

「はいは、一回」

先日の件から士郎はモードレッドの事をモードと呼んでいる。なんかそう呼べって言われたらしい。

因みにギルガメツシユが若干ジエラシツて士郎に自分の事をギルと呼ばせていたりする。

「エルザ・スカーレットだよろしく頼む。」

「これは、お近づきに」

そう言つて士郎は食後のデザートにと用意していたショートケーキの自分の分をエルザに渡す。

「む、有難う」

そう言いショートケーキを口にするエルザ

「…」

エルザが固まった。

そして、気が付いたらケーキが無くなっていた。

「なにこれ！美味しい！」

そこにルーシイの声が聞こえてくる。

この反応から二人の胃袋が完全に驚掴みになった事は言うまでも無いだろう。特にエルザ

その後暫く談話を楽しんでいた

「それで、依頼料が減らされて今月の家賃ヤバいですよ」

話しはいつの間にか途中からルーシイの愚痴にすり替わっていたが。

「アイツ等元気だからなく」

「ハツハツハ、アイツ等バカかよ」

「これだから雑種は…」

「まあ、なんかあつたら家に来な部屋は沢山余ってるから。」

「アハハ…、でも士郎さんの料理が毎日食べられるのは魅力的かも…」

そんな事を言つて結構本気で悩むルーシイ

「それなら私も住まわせてくれないか？士郎の料理が食べられるなら高額でも家賃を払おう」

本気で士郎の腕を掴みながら言うエルザ

その後英雄王を一悶着在ったが結局エルザと一緒に住むことになった。

ルーシイーは今の生活が気に入ってるらしく暫くは頑張るそうだ。ヤバくなったら一緒に住むとは言っていたが…

このやり取りを聞いていたギルドのメンバーが男つ気の無いエルザが男と同居する事に半狂乱し、中にはガチで泣いてる者の姿も…

まあ、理由は二通り、男つ気の無いエルザが拾われていくのに安堵し喜ぶ者と美女のエルザが男と同居する事にジエラシーを暴走させて悔し涙を流す者だ

「そう言えば…、おい！ナツ！グレイ！こつちに来い！」

エルザは何かを思い出したようでナツとグレイを呼ぶ

「な…何だいエルザ？俺達は何時も仲良しだぜ…」

「そうそう！」

白々しい演技をしながら此方に来た二人。

「いやな、今回の依頼の帰り道に何やら不穏な話を耳にしてな、その事実確認と事実だった場合の対処の為に前達を連れて行こうと思っただけ。この後すぐに出るぞ」

「ほおう、面倒事か」

ギルが興味を示す。

「ああ、今回はちよつと危険な品が絡んでるらしくてな…」

「なあ、士郎達は行かないか？」

ナツがそんな事を言い始める

「お前ら滅茶苦茶つえーじゃん、一緒に行ったら直ぐに解決すんじゃないのか？」

ナツが珍しく冴えた事を言う

「まあ、それは構わんが…」

「じゃあ決まりな！ルーシイーも準備しとけよ！」

「え！私も!？」

「おいおい、此れってフェアリーテイル最強パーティーじゃねえか!?」  
周囲がざわつく、それもそうだろう。実際士郎達が入ったパーティーは実質最強パーティーだろう。

こうして、士郎達はただ働きをする事になったのだった。

## ゴーインググマイウエイ

「なるほど、闇ギルドが…」

目的地、オニバスの街に向かう列車の中士郎達はエルザから事の詳細を聞いていた。

「そのララバイってのはどんなもんなんだ？」

「ああ、それが詳細までは分からなかったんだ。」

「それで、事実確認の為にこんな物騒なパーティー組んだの？」

「ああ、闇ギルドが関与した時点で危険な物の可能性が高い、大事を取ってナツ達を連れ来たのだ。ところで君達の実力はどのくらいなのだ？ナツが強いと言うくらいだ、かなりの物だとは思うのだが…」

「凄いなんてものじゃないわよ！前にモードレッドさんと士郎さんが模擬戦してる所を見た頃があるけど、早すぎてまったく内容が分からなかったわ！ナツも所々見えなかったっていつてたし！」

「ほおう、それほどなのか…」

「そんな大したものじゃないよ、まだまだ修行の身さ、それより着いたみたいだぞ。」

列車を降りる面々

「で？此処からどうするんだ？」

「取り敢えずこの街に居る闇ギルドメンバーを探し出し尋問する。」

「了解」

「所で、ナツが見当たらないんだが…」

「ん？」

出発する列車

「まさか、アイツ…降り損ねたのか…」

「トカゲめ、手間を掛けさせる。」

「トカゲって…」

今回最初のギルの言葉がナツのトカゲ呼びだったことに呆れるルーシー

「取り敢えず列車を追うぞ！ナツを回収する！」



そう言つてエルザは駆け出して行つた。

「先が思いやられる…」

士郎は遠い目をしてそう呟いたとか。

\*\*\*\*\*

「で、何此の愉快的なデザインの乗り物…」

「これは魔道四輪車、操縦者の魔力を使って走る乗り物よ」

士郎は馬車と車を合わせたようなデザインの乗り物に苦笑いする。  
しかし性能はそこそこで列車に追いついた。

「あ」

そこに列車からナツが飛び出て来た。

「これでやっと本題に移れるな…」

「それにしても、なんで飛び出て来たんだ？」

「確かに酔つて動けなかった奴があんなダイナミックな登場しないな。」

「士郎よ、我は飽きて来た、何か面白い事をせよ」

「無茶言うなよ…」

「この三人は常時マイペースなようだ」

「何だと！」

そこにエルザの声が聞こえて来た。如何やら雑談をしている内に話しが進んでいたようだ。

「集団呪殺魔法だと！今すぐ奴らを追うぞ！」

「そう言つて動き出す魔道四輪車」

「集団呪殺つて…、なんか思つてたより物騒なもんが出て来たな…」

「そう言うのつて俺達英霊にも効くのか？」

「大丈夫じゃないか？駄目でもなんか笛らしいし吹かせる前にやれば何とでもなる。」

「我がその程度の事でどうにかなる訳があるまい、我が財宝にもその手の物はあるが、我はレジストする術を持っておる。」

この三人は会話からして次元が違うようだ。

\*\*\*\*\*

## オシバナ駅

「で、絶賛囲まれ中なわけだ」

「こんな人の居る所で万が一にも笛を吹かれないように敢て逃がしてみただけ取り押さえてもよかったな…」

「我はこの様な雑種の相手など面倒だぞ」

「定例会が狙いならもつとスマートに事を運べばよかったのに…、確かにこれじゃあ悪人としても三流以下だな…、あの笛は一級品だったのに…」

「なあ土郎、あの笛解析できたか？」

「ああ、剣じやないからそこまで詳しくは分からなかったけど、あれは笛の音以外にも何か在るな…」

三人はエルザが雑魚相手に無双しているのを眺めながら未だマイペースで談話する。

「それにしても土郎、お前正義の味方なのにこの状況で全く動かないのはなんでだ？普段のお前なら我先にと突っ走るもんだと思ってたんだが…」

「ああ、それはな、思ったより相手が格下だったからアイツ等に、特に新人のルーシーに経験を積ませようと思つてな。」

「ああ、なるほど」

「まあ、ヤバくなつたら手伝うさ。おつ、この結界から抜け出す手段を手に入れたみたいだな」

「我はあんな道通らぬぞ」

「じゃあ自力で出てくれ…」

「言われるもでもない」

そう言つてギルは宝物庫から宝具を取り出し一人結界を抜けて行った。

「俺等も行きますか」

\*\*\*\*\*

「さて、多分ナツ達が何とかすると思つたから先に定例会会場に先回りしたけど…ギルが我慢の限界だな、アイツ暇を持て余し過ぎてイライラしてるよ…」

「全く…しょうがねく奴だなく…」

ギルの相手に四苦八苦し始めたその時、巨大な悪魔が姿を現した。

「ハア…アイツ等、詰めが甘い…、ギル、大取だ、アイツなら多少暇もつぶれるだろう?」

「フツ、良いだろう…、この私が相手をしてやろう。」

そう言つて歩いていくギル

「あれ!?ギルガメシユさん!?それに土郎さんにモードレッドさんも!?今までどこに行つてたんですか!大変だったんですよ!」

此方に気づいたルーシイが叫んでいる。

「騒ぐな雑種、この程度でギャーギャー言つては此処先直ぐに死んでしまふぞ?」

「マカロフ殿、あの者達は…」

他のギルドマスター達も土郎達の登場に疑問を投げかける。

「あの者達は最近入った者達での、聞いた事くらいは在るんじゃない

かの？破壊者達じゃよ」

「なんと…！最近噂のAランククエストを総なめに行っていると云うあの！」

士郎達は入団早々有り得ない速度で高難度討伐クエストを攻略しまくった常識破りの速度と、その何者おも寄せ付けない戦闘力から破壊者達と裏で囁かれている。

まあ大体はギルが高火力で敵を屠ったのが元の原因だったりもする。

「そいつの相手は我が直々にしよう、少々暇を持て余していたのだ…、精々楽しませろ。」

ギルは言い切ると悪魔の周囲に宝物庫を展開する。

そこから先はワンサイドゲームだ

剣群がその威力から突き刺さる事無く貫通し悪魔をハチの巣にする。

「バカな！バカなバカなバカなバカなー！！」

あまりの事態に悪魔が叫ぶ

「他愛もない」

巨人は四肢を裂かれ胴体を穴だらけにして動きを止めた

「士郎、この木片の処理は任せたぞ」

「後処理は俺かよ…」

「貴様の贗作で爆砕すればよかろう？贗作者」フエイカー

「ハア…、分かったよ英雄女王」お姫様

「な…!?貴様！」

士郎は若干頬を赤くして抗議しようとしたギルを無視して悪魔の残骸に歩み寄る

「投影・開始」トレイス・オン

憑依体験 共感完了

ロールアウト  
工程完了  
全投影，待機  
バレット  
クリア

フリーズアウト、  
停止凍結、  
ソートパレットフルオープン  
全投影連続層写…!!!  
!!!

劍群が悪魔の全身に突き刺さる

ブローケン・ファンタズム  
「壊れた幻想」

爆発

悪魔は完全に木っ端微塵に爆砕する。

「さて、帰るか…」

「士郎、今日の晩飯は何だ？」

「今日はパスタ」

「なんだよ、肉にしよーぜ！」

「士郎よ、今日は我が用意した食材でフルコースに変更だ」

「はいはい…」

「よっしゃ！これで多少は肉が食えるぜ！」

三人は何事も無かったかのように去って行った

この光景に周囲は啞然とし、我に返ったのは少し先の事だった。

## Sランククエスト

「デリオラ？ああ、あの氷に閉じ込められた哀れな悪魔か」

「ん？知ってるのか？ギル」

「ああ、前にある島の遺跡に行った時にそれらしい物を見た」

「ふくん、で、マカロフさん、それがどうしたんだ？」

ギルドのカウンターで何時も野三人は食事を取りながらマカロフから依頼を受けてくれと頼まれ詳細を聞いて居た。

「それがの、ナツ達が勝手にS級クエストに行ってしまったの…、その行先にデリオラと思しき氷の塊が持ち込まれたとの情報を手に入れたな、ナツ達の捕獲にエルザを行かせたのじゃがデリオラが絡んでいるならエルザ一人では荷が重いと思つての、そなたらにも増援に行つて欲しいのじゃ。」

「何やつてんだよ…、アイツ等…」

「アハハハ、アイツ等マジでバカだな！」

「雑種め、部をわきまえる事を知らんのか。」

三者三様の反応だがどこか余裕を感じさせる反応をする三人

「どうじゃ？頼まれてくれんかの？」

「ん、まあ、構いま『断る』…。」

承諾しようとした士郎のセリフに被せてギルが依頼を断る。

「なんでさ？」

「貴様らは勘違いをしているようだが、アレはもう死んでいる。」

「死んでる？」

ギルの発言の意図を探ろうとする一同

「言葉通りだ、聞けばアレは10年もの間氷に閉じ込められているそうじゃないか。アレはこの十年でその氷に命を蝕まれ最早氷の呪縛から解けようとも長くはあるまい。」

「成程、じゃあ何とかなるな」

「それに、雑種共が依頼に行つたのは何時の事だ？行つた所で今更やる事など残つて居るわけが無かろう？」

ギルの言う通りナツ達が依頼に出たのが三日前、エルザを追手に出したのが問題発覚から四時間後、デリオラの存在発覚が五時間前、そして今だ、首尾よくいって居ればもう帰って来ていても不思議ではない頃合いだ。

「ただいまー！ー！！」

その時ギルドにナツ達が帰って来た。

「いつも思うが、アイツ等は狙っているのか？」

士郎はあまりのタイミングに呆れかえる。

「…そなたの言う通り問題なかったようじゃの…」

マスターも何やら居たたまれない気持ちになっている

「まあ良い、ではこれとは別件で行って欲しい依頼が有るのじゃ」

そう言つてマカロフは懐から三枚の依頼書を出す。

「…Sランククエスト、巨兵アンデルスの討滅

Sランククエスト、深海王リヴァルトの討滅

Sランククエスト、凶賊集団グロリアスの完全討滅」

差し出されたのはSランククエスト、先程まで問題になっていたランクの物だ。

「そなたらには、このクエストに行つて貰いたい、見事成功したら即座にS級に昇格じゃ。」

「どうする？」

「いいんじゃないか？どうせ暇だしAランクじゃあ物足りないしな」

「我も同意だ、このくらいでなければ余興にもならん」

「じゃあ、満場一致で受けるつて事でお願ひします。」

こうして、三人はSランククエストに出かけて行った。

因みに割り振りは

アンデルス↓モードレッド

リヴァルト↓ギルガメッシュ

グロリアス↓士郎

である。

士郎は若干人間の討伐に顔をしかめたが了承した。

ギルがリヴァルトなのは深海での戦闘が出来るのがギルくらい

だったからだ。

モードは巨兵と言う響きがなんか強そうだからと言う理由だ。

更に余談だが、士郎がリヴァルトをフィッシュシユしたくてうずうずしていたそうだ

それに気づいたのは、釣り好きと知っているモードレッドとギルクらいだ。

\*\*\*\*\*

side. モードレッド

ファイオーレ王国辺境のとある平原、モードレッドは一人それと対峙していた。

「おらおらー！どうしたその程度か！」

モードレッドの本気の攻撃にのけぞるアンデルス

アンデルスは必死にモードレッドへと攻撃するが当たらない

「おいおい、Sランクって言うから期待したのにこの程度かよ……」

落胆するモードレッド、そこに残る全魔力を乗せた拳が放たれる

それにモードレッドは同じく魔力を乗せた拳を放つ

そう、拳だ…、モードレッドは剣では無く拳、つまりS級相手に素手で圧倒していた。

そして攻撃が交わった時、アンデルスの腕だけが爆散した。

「もう終わらせるか、素手とは言え俺に本気を出させた事に敬意を表してやるよ。」

そう言つてモードレッドは愛剣クレラントを召喚する。

「あばよ……」

そして、モードレッドの姿がぶれた、モードレッドはアンデルスに背を向け歩き出す。

アンデルスは訝しみながらも好機と攻撃しようとした。



しかし、その瞬間アンデルスは細切れになり意識を永遠に失った。  
「さて、帰るか…、もう五日も土郎の飯を食ってねーからな…、」  
モードレッドは思いのほか移動に時間が掛かり五日間も土郎の手料理を食べていない、既に禁断症状一歩手前だ…  
「よしー早く帰って土郎に飯を作ってもらおう！」  
そう言つてモードレッドは残る残る魔力を全て集めて全速力で走り去っていった。

後にこの全力疾走したモードレッドを見た物が地を駆ける流星を見たと噂し、暫く国中で話題になったそうだ。

side. out

\*\*\*\*\*

side. ギルガメツシュ

ギルは今港の沖、約30キロの地点でフィッシングをしていた。  
と言うのも土郎が釣り好きな事を知り自身が大物を釣り上げた事を自慢しようと思つたようだ。まあ、早い話しが気になる異性に意地悪をしたくなつたりする小学生みたいな感情の延長から来る行動だ。そのため天翔る王ツインの御座マーに乗り竿及びワイヤーエルキドゥーは天の鎖エルキドゥーで代用すると言う釣りチートチートを地で行っている。

因みに、ギルドを発つてから既に6日移動に2日掛け、4日間獲物であるリヴァルトが釣れるのを待つて居る。他に釣れた物は即座にリリースしている。

ギルなら宝具で即座に居場所を突き止め狙って釣り上げる事も可能なのだが、あくまでも釣りをしているのでその手の反則はプライドが許さない様だ。現在使っている宝具は許容できる範囲の物だけである。

「来たか…」

その時天の鎖に反応があった。

「ふむ、この感覚はかなりデカいな、やっと本命か？」

そう言っつてギルは天の鎖を一気に引き上げる

「ハッ！待ちわびたぞ！」

釣り上げたのは本命のリヴァルト

「しかし、不味そうだな…、あわよくば食してやろうとも思うたが、やめだ、その醜い身体！一片たりとも残さずに逝け！」

その後は語るまでも無く何時ものワンサイドゲームだ。

「ふむ、では帰るとするか、士郎の奴にフルコースディナーを用意しさせよう。」

こうして、ギルのSランククエストは終わったのだった。

side out

\*\*\*\*\*

side. 士郎

「全員武器を置いて投降しろ！」

士郎はグロリアスに向けて警告をしていた。

「ああ？こいつバカじゃねえの？俺達に向かつて投降しろだ？正気じゃねえな！」

「まあ良いじゃねえか、粹がった事を公開させてやりな！」

そう言っつてグロリアスは一斉に襲い掛かる。

「警告はしたぞ…」

苦虫を噛み潰したような顔で士郎は干将・莫邪を構える。

死屍累々

その場には屍が積み上げられ生きている者は一人として居ない…、シロウ以外は。

今回の依頼は完全討滅、つまり一人残らずに皆殺しである。

唯一最初の警告で投降した者は殺さずとも良かったのだがそんな事は凶賊相手に期待できない時点でこれは決まった事だった。

「体は剣で出来ている…」

そう呟いて士郎はその場を後にし、ギルドへの帰路についた。

正義の体現者、今の士郎の背中はあの赤い弓兵にそっくりに見えた…。

帰ってからのごたごた

「全員伏せろおおおっ!!」

エルザが叫び換装しながら前が出る。

「魔道砲 ジュピター 放て」

ギルドに向かって放たれた高濃度エーテル粒子魔道砲ジュピターを止めるべくエルザは金剛の鎧で受け止める。

しかし流石のエルザもこれを受けきる事は出来ない。

後ろで啞然としてるギルドメンバー達ももうダメかと思ったその時

『I am the bone of my sword』

「熾<sup>ロ!</sup>天覆<sup>ア</sup>う七<sup>イ</sup>つの円環<sup>ス</sup>!」

エルザとジュピターの間に七枚の花弁が咲き誇った  
内一枚が砕けそこでジュピターは終息した。

「これはどういう状況だ?」

その場に居た全ての者が声のした方向に視線をやる。

「「士郎!!」」

そこに居たのはSランククエストに行っていた士郎だった。

「ああ、ただいま、それで? 取り敢えずあの動くダサイ要塞をぶっ潰せばいいのか?」

士郎は余裕の表情で問いかける。

「貴様アアア!!何者だ!邪魔をするなアア!!」  
ジョゼフの怒声が響き無数のシエイドが湧き出てきた。  
更に要塞からアームが出て来て魔法陣を書き始めた。

「五月蠅いぞ、吠えるな雑種…」  
「面白そうな事やってんじやん」

しかしそのシエイドも湧いて来た瞬間に消し飛ばされていき、アームも切り飛ばされた。

「お、モード、ギルお帰り…って言っても俺も今帰ったところだけ…」

「あー、ただいまだ、それにしても帰って来て早々なんか面白そうな事やってんじやん!俺も混ぜろよ!」

「フツ、この程度の雑魚に手こずりおって…」

「まあまあ、それでだ、ナツ、グレイ、後はそうだなあ、エルフマン、この三人でちよつとあの要塞の中に殴りこんで来いよ。外は俺らが受け持つから。」

「ちよ…ちよつと待て士郎!…どういう事だ?話について行けないぞ?」

三人の行き成りの登場に混乱する面々

「ん?ああ、この程度の相手ならお前らでも対処できそうだから行って経験を積んで来いって事だよ。お前ら血の気が多いから行きたくてうずうずしてるみたいだしな」

「成程…」

「何かよく分かんねーけど兎に角ぶっ飛ばしてこれば良いだろ!」  
「漢だ!」

エルフマンが若干意味わからない事を言っていたが士郎の言っている事を理解した三人はダツシュで要塞に突入していった。

「おい士郎おー、俺も暴れたいんだけどおー」

「Sランククエストで暴れて来たばっかりだろ。我慢しろよ。」

「…ねるモードを取り押さえながらシエイドを屠って行く士郎

「……」

この状況に殆どの者達がついて行けていない。

「士郎さん……」

「ん？どうした？」

ルーシイが今にも泣きそうな顔で士郎に声を掛けた。

「この状況ね…私のせいなんだ…」

「そうなのか？」

「うん、私がハートファイリア家の令嬢だから…そんな令嬢がフェアリーテイルに入ったのがズルいって、向こうのギルドマスターが嫉妬しちゃって…」

「ふくん、で？」

士郎は心底分らないといった表情で首をかしげる。

「だから…私のせいで「悪い事をしたのか？」…え？」

「ルーシイは悪い事をしたのか？他人に何か迷惑になるような事を進んでした事は有るか？ないだろ。寧ろナツ達の暴走を止めて迷惑を掛けないようにしたり困っている人を出来る範囲で助けようとしたりする事だつてあるだろ。」

「でも…」

「分かった。今この状況で俺達に迷惑が掛かって居ると思ってるなら今すぐこの下らない戦いを終わらせる。ギル！」

士郎はギルに一声かける

「チツ、この仕事は高くつくぞ…」

「一週間食材込みで俺持ちで最高級フルコース三食で手を打ってくれ！」

「その言葉忘れるなよ！」

ギルは天の鎖を操り要塞の中に鎖を侵入させる。

士郎は弓を投影して手に取る。

「I am the bone of my sword」

そして、次いで投影したのは捻じれ曲がった歪な剣だった。

その剣から発せられる魔力と禍々しさに周囲の者達は気圧され大量の汗をかき始めた。

それは離れた位置に居るジョゼフも同じである。

「な…何だ…アレは…」

士郎は剣を弓につがえる。

その瞬間ジョゼフは猛烈な死の予感に駆られた。

本能に従い急いでその場から離れようとする。

そこでギルの天の鎖が要塞から出て来た。

その先にはナツやグレイ、エルフマン達突入組と向こう側のギルドメンバーと思われる者数人が縛られていた。

「カラドボルグ 偽・螺旋剣!!」

士郎が矢を放ったその時には既に矢がジョゼフを捕えていた。

その速度は早いでは済ませられない程で音速を突破して更に早かった。

「フロクシ・ファンタズム 壊れた幻想」

しかしそれだけでは終わらなかった。

矢がジョゼフを捕えた瞬間に士郎は矢に内包された魔力を一気に膨れ上がらせて爆発を引き起こした。

その規模は要塞全体を飲み込み跡形も残さず消し飛ばされていた。

そして、その爆風で此方のギルドメンバーも数人後方へ吹き飛ばす。

未だ粉塵収まらない中士郎が口を開く

「これでこの戦いは終わりだ。向こうはギルドマスターが沈んだ。この壊れたギルドも新しく出来ると思えば悪い事じゃ無い。この程度の障害で君を迷惑だと思ふ者はこのギルドにはいないと思うよ。」

答えは聞こえてこない。

それでも答えは分かった。

流れた涙は粉塵に紛れて誰にも気づかれる事は無かった。  
「さあ、君の冒険はまだ始まったばかりだ。」